



language barrier に苦しんだ、 若き日の自分に贈りたい 1 冊

評者 倉本 秋 高知医療再生機構理事長

本書の著者であるジャンさんとの出会いは、1980 年代後半までさかのぼる。当時、私が勤務していた東大病院分院の助教授から、ジャンさんを紹介された。知り合って 10 年間は、2 週間に 1 回程度おしゃべりの機会をもち、論文ができたらか校閲してもらっていた。その後、私の職場は高知大、そして高知医療再生機構へと変わったが、投稿論文はすべてジャンさんの手を経ており、今では機構が販売する学内委員会 Web 審査システムの英文マニュアルまで校正をお願いしている。

今回、本書を読み進めながら、30 年以上前にレトロな東大分院の建物で教えてもらっていたことは、ステップⅠの「英語のマインドをつくる」に述べられている内容であったと気づいた。たしかに、科学論文を書こうとする日本人は皆、英作文はできる。しかし残念なことに、「(日本の)学校英文法」とは似て非なる、「英文」を構成する法則やコンセプトの理解は欠落している。native speaker (以下、native) が学ぶような paragraph writing の概念を教える授業は、日本にはないからである。そこをすっ飛ばして中学から大学まで英語を学んだ若い研究者たちは、卒前あるいは卒業後しばらくして初めての論文を完成させる。「事実上は現在形で」とか、「受動態は少なめがよい」とかいう先輩の指示だけを道標に…。 “paragraph” を日本語の「段落」に置き換えただけの頭では、「ミニエッセイ風」などの構成は思いも至らない。このような前提を知らないと、native の proofread を受け取った時、その朱字を許容しがたい場合がある。native も、日本人の文の順序や改行を怪訝に思いながら、校正と格闘する羽目になる。

推奨したいのは、本書の 3 つの使い方である。まず、将来科学論文を書く可能性のある人は、卒業した時点で本書を読んでおいてほしい。そしてステップⅠの「英語のマインド」だけはきちんと理解しておくことを勧めたい。以後、英語論文を読みながら、耳障りでない英語をかぎ分け、自分の糧にするために有用である。次に、論文を書く時には、Materials and Methods などのセクションごとにステップⅡ「科学英語論文の作法」の該当する項目を一読してから、英語類語辞典を手許に置いて書く作業を積み上げていくとよい。最後に、論文を書く前はいつでも signal words の分類とステップⅢ「センスがよくなるコツ」を読み返す習慣をつけると、自身の論文の質を高めることと後輩の指導に活かそうである。こうすれば、編集者から「There is a language barrier」と言われない、研究に対する正当な評価が待っている。

英文学術誌の編集者であり、本書の執筆に協力された岩永敏彦先生のコラムも参考にしてほしいし、もちろん native の英文校正が必須であることは変わらない。投稿誌の論文の傾向をつかむ、その雑誌に必要な字句の定義を考える、大文字ルールを知るなどの教えも、示唆に富んでいる。参考文献の年巻号頁の記載順だけをチェックして論文を書き始めた私の若かりし頃にも、この本があればと悔しくなる。本書の価値は AAA である。



トップジャーナルに学ぶ センスのいい 科学英語論文の 書き方

ジャン・E・プレゲンズ＝著
岩永敏彦＝執筆協力

定価：3,740 円（本体 3,400 円＋税）
A5・160 頁／医学書院／2022
[ISBN978-4-260-04625-1]